

## はじめに

『出版状況クロニクル』の5冊目をお届けする。

これまでと同様に、本クロニクルは出版業界の歴史と構造、出版社・取次・書店という近代出版流通システムと再販委託制の問題をベースにして、第一次データというべき出版物販売金額を始めとする数字をたどり、毎月の出版業界を定点観測した記録からなっている。

今回は2016年から17年にかけてであるが、出版状況が月を追うごとに悪化し、危機から崩壊と解体へと向かっていることが生々しく伝わってくるだろう。

大洋社の破綻から始まり、丸善ジュンク堂の経営陣の辞任に至る、この2年間は雑誌の凋落と重なり、これまで以上に出版業界に大きな衝撃をもたらしたはずだ。

この先に何が待ち受けているのか、それを記録することが本クロニクルに負わされた義務のようにも思えてくる。

それゆえにもうしばらく書き続けていくことを約束しよう。

著者

# 目次

はじめに

## 2016年度

クロニクル①	2016年1月	2
クロニクル②	2016年2月	19
クロニクル③	2016年3月	38
クロニクル④	2016年4月	57
クロニクル⑤	2016年5月	77
クロニクル⑥	2016年6月	94
クロニクル⑦	2016年7月	112
クロニクル⑧	2016年8月	126
クロニクル⑨	2016年9月	140
クロニクル⑩	2016年10月	154
クロニクル⑪	2016年11月	169
クロニクル⑫	2016年12月	187

											2017年度
クロニクル	(24)	2017年12月	378	クロニクル	(23)	2017年11月	364	クロニクル	(22)	2017年10月	349
クロニクル	(21)	2017年9月	333	クロニクル	(20)	2017年8月	319	クロニクル	(19)	2017年7月	301
クロニクル	(18)	2017年6月	285	クロニクル	(17)	2017年5月	269	クロニクル	(16)	2017年4月	255
クロニクル	(15)	2017年3月	236	クロニクル	(14)	2017年2月	218	クロニクル	(13)	2017年1月	204



2016年度

## クロニクル① 2016年1月

15年12月の書籍雑誌の推定販売金額は1290億円で、前年比5・6%減。その内訳は書籍が572億円で、同1・4%増、雑誌は718億円で、同10・5%減、そのうちの月刊誌は600億円で、9・3%減、週刊誌は117億円で、16・5%減。

雑誌の落ちこみは3ヵ月続けて二ケタマイナスで、これに16年はさらにマイナスを重ねていくことになれば、月刊誌にしても週刊誌にしても、採算ベースを割ってしまう雑誌が多く出てくると予測される。15年の月刊誌は7・2%減、週刊誌は13・6%減となっているからだ。

雑誌をベースにして組み立てられた出版社・取次・書店という近代出版流通システムが解体していく悲鳴のようなものが、マイナス数字にこめられている。

それでも返品率のほうは年末とあってか、書籍37・4%、雑誌38・8%と40%を下回った。このような出版状況の中で、2016年が始まっていることになる。

〔1〕 出版科学研究所による1996年から2015年にかけての出版物推定販売金額の推移を

(億円)

## ■出版物推定販売金額

年	書籍		雑誌		合計	
	金額	(前年比)	金額	(前年比)	金額	(前年比)
1996	10,931	4.4%	15,633	1.3%	26,564	2.6%
1997	10,730	▲1.8%	15,644	0.1%	26,374	▲0.7%
1998	10,100	▲5.9%	15,315	▲2.1%	25,415	▲3.6%
1999	9,936	▲1.6%	14,672	▲4.2%	24,607	▲3.2%
2000	9,706	▲2.3%	14,261	▲2.8%	23,966	▲2.6%
2001	9,456	▲2.6%	13,794	▲3.3%	23,250	▲3.0%
2002	9,490	0.4%	13,616	▲1.3%	23,105	▲0.6%
2003	9,056	▲4.6%	13,222	▲2.9%	22,278	▲3.6%
2004	9,429	4.1%	12,998	▲1.7%	22,428	0.7%
2005	9,197	▲2.5%	12,767	▲1.8%	21,964	▲2.1%
2006	9,326	1.4%	12,200	▲4.4%	21,525	▲2.0%
2007	9,026	▲3.2%	11,827	▲3.1%	20,853	▲3.1%
2008	8,878	▲1.6%	11,299	▲4.5%	20,177	▲3.2%
2009	8,492	▲4.4%	10,864	▲3.9%	19,356	▲4.1%
2010	8,213	▲3.3%	10,536	▲3.0%	18,748	▲3.1%
2011	8,199	▲0.2%	9,844	▲6.6%	18,042	▲3.8%
2012	8,013	▲2.3%	9,385	▲4.7%	17,398	▲3.6%
2013	7,851	▲2.0%	8,972	▲4.4%	16,823	▲3.3%
2014	7,544	▲4.0%	8,520	▲5.0%	16,065	▲4.5%
2015	7,419	▲1.7%	7,801	▲8.4%	15,220	▲5.3%

示す。

『出版状況クロニクルⅣ』の48で、15年度の出版物売上高は1兆5200億円前後であろうと予測しておいたが、ほぼ同様の数字となった。そればかりでなく、表から分かるように、15年は5・3%と最大の落ちこみである。雑誌の8・4%の凋落に象徴されるように、16年はさらにマイナスが加速していくことは確

実だ。この1996年から2015年にかけての出版物販売金額の推移の中に、出版業界の失われた20年の実態がこめられている。何と20年間で1兆1344億円が失われたのであり、数年のうちには半減ということになる。これが90年代後半から崩壊過程に入っていた、再販委託に基づく出版社・取次・書店という近代出版流通システムの帰結だといっている。2000年の時点で、そうした状況に抗するためには出版業界の歴史を検証し、危機感を共有し、再販

委託制に代わる現代出版流通システムを提起しようとする想像力の確立が必要だと考え、私が出版業界の絶対権力者であれば、どうするかという書籍に関する13の試案を、安藤哲也、永江朗との鼎談集『出版クラッシュ?!』（編書房）の「あとがき」に記したことがあった。それらを以下に再録してみる。

- 1 再販制と委託制の廃止。
- 2 低正味買切制へ移行。書店マージンを10%上げ、出版社は卸正味を10%下げる。
- 3 販売価格は書店が自由に決める。
- 4 1年間書店の新規開店凍結。
- 5 1年間新刊書籍の刊行を中止。
- 6 書店は新刊仕入れがなくなる訳だから、既刊分を自主的に選んで棚作りに専念する。
- 7 出版社の編集部は1年間営業に回り、書店営業を体験し、書店の生の声を聞く。
- 8 取次は新刊配本がなくなり、売上は下がるが返品がゼロとなるため、流通経費は大幅に下がる。買切注文制にすれば入金率は上がる。歩戻しも廃止する。
- 9 新刊発刊を1年間停止すれば、新古本産業に流入する新古本は激減すると予測される。
- 10 このことによって、書店はブックストアとマガジンショップに棲み分けしていくことになる。
- 11 新刊委託配本はなくなり、書店はプロの仕入れが必要となる。従って本に詳しい書店人が専門職として成立する。



■電子出版市場規模

(単位：億円)

年	2014	2015	前年比 (%)	占有率
コミック	882	1,149	130.3	76.5
電子書籍	192	228	118.8	15.2
電子雑誌	70	125	178.6	8.3
合計	1,144	1,502	131.3	100.0

- 12 買切注文制により、返品ゼロ市場が出現すれば、何よりも資源の保護につながる。
- 13 無論、淘汰される出版社、取次、書店も予想されるが、業界三社が仕入れを巡る緊張した関係を構築する方向に向かう。

これらにはあまりにも空想的で実現不可能な暴論だとの、反論、異論を受けたことを思い出す。しかしその後の出版危機の進行と深刻化、その帰結としての現在の出版状況を直視すれば、こうした改革へと向かうしかなかったと判断するしかない。だがそれらはひとつも実現することにはなかつたし、出版業界は末期的な危機状況の中に追いやられてしまったことになる」

〔2〕 出版科学研究所が電子出版市場の独自の推計を始め、『出版月報』1月号に掲載しているので、それも引いておく。

【これまでは電子出版市場に関して、『出版状況クロニクルⅣ』などで示しておいたように、インプレスのよる調査を参照してきた。こちらは4月から3月期の年度だが、出版科学研究所は1月から12月の暦年であるので、2014年の数字に違いが生じている。それはともかく、15年電子出版市場規模は1502億円で、前年比31・3%増となっている。そのコアはやはりコミックで、77%のシェアを占める149億円に及び、スマートフォンの普及による市場規模拡大とされ

■ 2015年 年間出店・閉店状況

(面積：坪)

月	◆新規店			◆閉店		
	店数	総面積	平均面積	店数	総面積	平均面積
1月	3	431	144	68	5,562	87
2月	6	657	110	69	7,642	114
3月	21	3,701	176	97	8,503	93
4月	31	5,642	182	53	3,960	81
5月	11	4,090	372	52	4,135	83
6月	9	1,062	118	51	3,663	75
7月	17	4,655	274	47	4,996	114
8月	7	2,342	335	54	6,258	118
9月	21	2,805	134	61	6,125	107
10月	25	4,183	167	52	2,769	60
11月	19	3,614	190	41	4,406	113
12月	19	2,358	124	23	2,837	135
合計	189	35,540	188	668	60,856	97
前年実績	217	48,215	222	656	64,920	108
増減率(%)	▲12.9	▲26.3	▲15.4	1.8	▲6.3	▲10.4
増減率(%)	18.3	17.9	▲0.3	2.3	-	▲2.6

る。出版科学研究所はこれから上半期と下半期と年2回調査発表していくようなので、これ以上のコメントは加えず、まずはデータを示しておくことにする。

〔3〕 アルメディアによる2015年の書店出店・閉店数が出された。

【出店189店に対して、閉店668店である。これは15年も書店が減少し続けていることを告げているし、それは坪数も同様で、出店と差し引きすれば、2万5316坪の純減だが、閉店による減床面積は6万856坪である。閉店1店当たりの平

■ 2015年売場面積上位店

(単位：坪)

順位	店名	売場面積	所在地
1	二子玉川蔦屋家電	2,200	東京都
2	MARUZEN 名古屋本店	1,500	愛知県
3	文苑堂書店富山豊田店	1,406	富山県
4	梅田蔦屋書店	1,200	大阪府
5	ジュンク堂書店高松店	1,128	香川県
6	三省堂書店池袋本店	1,030	東京都
7	丸善京都本店	999	京都府
8	蔦屋書店茂原店	900	千葉県
9	ビッグワン TSUTAYA 宇都宮南店	800	栃木県
10	丸善岐阜店	772	岐阜県

均面積は97坪となり、14年の100坪よりも縮小しているが、ほぼ毎日97坪相当の2店が閉店し、膨大な返品が生じているとわかる。大型出店は丸善ジュンク堂4店、CCC4店と実質的に2社で占められ、それが周辺中小書店を閉店に追いやっていく構図は16年も続いていくだろう。取次別に見ても、出店は日販92店、トーハン71店、大阪屋21店で、189店のうちの184店が3社で占められ、その他の取次はもはや新規出店から撤退したと見なせるかもしれない。それから14年の大型店ベストにゲオ4店が入っていたが、15年は姿を消している。そのことでトーハンの増床占有率が日販に代わっている。ゲオのそれらの大型店、及びトーハンとゲオの関係はどうなっているのだろうか。なお大洋図書の本FC店188店が、大洋社から日販へと帳合変更される【

〔4〕『朝日新聞』（1/20）に村上春樹『職業としての小説家』を刊行したスイッチ・パブリッシングの新井敏

記社長へのインタビュ―が掲載されている。それを要約してみる。

\* 村上の初めての自伝的エッセイをどのように売るか、従来の読者に届くためにはどのようにしたらいいのか、初版部数はどのくらいにすればいいのかを考え、初版部数を10万部とした。そして販売方法、資金計画を考えた。

\* ところが大きな壁は流通だった。スイッチ・パブリッシングの場合、取次への出し正味が67%、配本手数料制の歩戻しが5%であり、実質的には本体価格の62%ということになる。しかも取次からの入金は7ヵ月後なので、資金繰りを含めた対策に迫られた。

\* 取次に歩戻しの見直しを申し入れると、村上本は特例として認めることを示唆するものの、取引条件の見直しは難しいとの返事だった。

\* その時点で、村上本の出版の挨拶で、紀伊國屋書店の役員に会ったところ、「うちで買い取って、新しい方法を試しましょうか」という予期せぬ提案が出された。

紀伊國屋書店としての中小出版社への応援、全国の小書店へのきちんとした配本への意欲、「リアル書店」の未来像と新しい流通模索の時期と重なっていた。

\* ただ紀伊國屋書店が大部数の書籍の取次の役割を果たすのは前例がなかったので、色々なケースを検討するうちに、初版部数の大半を親切とし、他の書店は紀伊國屋ルート、もしくは取次を通じての配本に落ち着いた。歩戻しはないために取次より好条件の取引だった。

\* 紀伊國屋がアマゾンなどのネット書店に対抗と報じられたのは不本意で、あくまで本の流通改善を求めた中小出版社の試みから始まったものである。ネット書店とも良好な関係を保ち、

紀伊國屋にもそれは了承を得ているし、街の本屋も大事にしたい。今回の試みがリアル書店を勇気づけられたとしたら、うれし。

\*初版10万部3刷で累計20万部に達し、試みは成功だったと思う。ただ取次との歩戻しの改善は一向に進んでいない。

【一般紙で中小出版社から取次正味と歩戻しと支払条件が、このように具体的に語られたのは初めてのことでないだろうか。『出版状況クロニクルⅣ』において、出版社上位100社で総売上高は1兆2117億円、売上シェアは65%に及ぶことを既述したが、これらの大手出版社は高正味、歩戻しなし、支払い条件は新刊にしても注文にしても、翌月100%払いだと見なせよう。もちろんそうした大小による取引条件の格差は、どの業界でもあるはずだ。しかし出版業界にとってそれが大きな問題なのは、再販委託制下にあることで、大手出版社の自転車操業を可能ならしめているメカニズムとなっているからだ。大手出版社はとにかく新刊を出し続けられ、売れなくとも取次に入れた分だけは翌月に入金されるシステムなのだ。それに反して、中小出版社の入金は一時的に滞るようになる。7ヵ月後だから、返品分は相殺されているので、同じ自転車操業でも、その度合いはまったく異なっている。このような大手出版社への取次の支払いメカニズムが大阪屋や栗田に及び、増資や倒産という事態を招来させたのは、それも大きな要因なのである。だが再販制維持に基づく新聞インタビューはそのことにまったく気づいていないと思われる。また15年2月期は日販、トーハンにおいて、新規出版社の口座開設が一件もなかったという】

## あとがき

論創社の森下紀夫氏の誘いによって、本クロニクルを書き始めたのは2008年のことだから、ちょうど10年にわたって、出版状況をレポートしてきた。

しかもそれは1999年刊行の『出版社と書店はいかにして消えていくか』（ばる出版、後刊論創社）に端を発しているので、20年以上に及んで出版状況を定点観測してきたことになる。

それらの記録は『ブックオフと出版業界』『出版業界の危機と社会構造』と続き、さらに現代出版史としての『出版状況クロニクル』へと引き継がれていったのである。

これらのすべてに関わり、企画と編集、復刊と出版を担ってくれたのも、他ならぬ森下氏であり、本当にお礼の言葉もないほどだ。そのためにも、この8冊が1990年代から2010年代にかけての日本出版史の基礎文献、資料として読まれることを願って止まない。

二〇一八年二月

著者

小田 光雄（おだ・みつお）

1951年、静岡県生まれ。早稲田大学卒業。出版業に携わる。著書『〈郊外〉の誕生と死』『郊外の果てへの旅／混住社会論』（いずれも論創社）、『図書館逍遙』（編書房）、『書店の近代』（平凡社）、『出版社と書店はいかにして消えていくか』などの出版状況論三部作、インタビュー集「出版人に聞く」シリーズ、『古本探究Ⅰ～Ⅲ』『古雑誌探究』（いずれも論創社）、訳書『エマ・ゴールドマン自伝』（ばる出版）、エミール・ゾラ「ルーゴン=マッカール叢書」シリーズ（論創社）などがある。個人ブログ【出版・読書メモランダム】<http://odamitsu.hatenablog.com/>に「出版状況クロニクル」を連載中。

## 出版状況クロニクルⅤ

— 2016.1 ～ 2017.12

---

2018年5月20日 初版第1刷印刷

2018年5月25日 初版第1刷発行

著 者 小田光雄

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1711-8 ©2018 Oda Mitsuo, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。